

何もかも真っ白だ。

気が付くとそこに座っていた。

見渡す限り何もない。

ただただ真っ白な空間。

いつものように自分の部屋でゲームをしていたはずなのに。

いつもと変わりなかったはずなのに。

それが、突然目の前が真っ白に。

そしてここにいる。

頭が状況についてこない。

たまにおかしな夢を見ることはあったけど、ここまでおかしな夢は記憶にない。覚えていないだけで、あったのかもしれないけど、記憶にはない。

すぐ隣に人がいることに気が付いた。

なんで気が付かなかったんだろう。

いや、隣だけじゃない。

そこら中に人がいる。

なんで気が付かなかったんだろう。

よく見ると、人じゃないかもしれない。

白い。

輪郭が影のように黒っぽく見えるだけで、顔も何も真っ白だ。

やっぱり夢か。

そう思うと、不思議と落ち着くことができた。

ここまで突拍子もないことは現実じゃない。

夢の中で夢を自覚することはたまにある。そういったときは、たいていすぐに目が覚める。

今回もそうだろう。

すぐに目が覚める。

「ようこそお越しくださいました。私は皆様の案内人を務めさせていただきます、お気軽に案内人とお呼びください。」

突然頭の中に直接響く声。その声に、全身が泡立つような不快感を感じた。

周りの人影もざわつく。そちらはちゃんと耳から音が、声が聞こえる。

音が耳から聞こえるというだけのことが、こんなにもホッとするととは。

「皆様方は、多大なる犠牲のもと異世界より召喚されました。」

再び頭の中に響く声。

異世界？

ラノベかよ。ってか、多大なる犠牲って。

指先がから冷たくなっていくような感覚。夢であってくれ。

「召喚って、ラノベとかでよくある？」

「マジか？勇者か？オレ。」

「何わけわかんねーこと抜かしてんだよ。ザケンナヨ！」

ちらほらと反応する声が聞こえるが、大多数が状況についていけないまま呆然としている。

異世界召還って、物語の中の話だ。

読むのは好きでも、現実になるとは思っていない。

なるはずがない。

だいたい、多大なる犠牲って何だ。

「皆様はこれより、とある世界にて生活していただきます。どこに転移するかは運次第ですが。どう生きるか、どう死ぬかは自由です。」

こんどは、先ほどよりも多くの反応が声の主に対して浴びせられる。

「無責任だ」「もとに戻せ」「ふざけるな」といった怒声が多いが、「勇者とかじゃないのかよ」「魔王は倒さなくていいんだ？」「当然チートはあるんだろ？」と言った、つぶやくような声、「家族がいるんだ。」「仕事が・・・。」「死にたくない。」などの、縋り付くような声も少なくない。

「召喚主様が求めるのは変革。それに足るであろう皆様を私が選別しお呼びしました。どう変革されるかは皆様次第。何の制限もありません。自由を謳歌なさってください。」

いや、それって何の目的もないまま知らない場所に放り出されるってことでは？

「待ってくれ！私には家族がいるんだ。仕事だって。異世界だか何だか知らないが、そんなことにかかわってる暇はない。すぐに帰してくれ！」

その声を皮切りに、あちこちで帰せコールが始まった。

「ご安心を。そのような憂いがないように万全の態勢でお招きしました。」

静かに、でも何よりもはっきりと頭に響く声に、帰れコールは押し殺される。

一呼吸の間に、周りからの音も声もなくなった。

キーンと耳鳴りだけが聞こえる。

「まず、元の世界の皆様はそのまま、これまで通りの生活をされています。お呼びした皆様は、魂のほんの一部。かけらにすぎません。ご家族にも、お仕事にも何の問題もございません。」

理解するのに少し時間がかかった。

もう戻れない。戻っても自分は別にいる。このことが、自分でも意外なほどあっさりと受け入れられてしまった。

今いる自分は何なのか。

クローン、とは違うか。コピーでもないし。かけらって何なんだよ。

これまで感じたことのない恐怖と不安が頭の中をかき回す。

そして気が付いた。自分もほかの人影同様、真っ白だ。

飯田 真一(はんだ しんいち)という日本人ではない。人間でも無い。

「魂はかけらですが、足りない分は召喚主様の多大なる犠牲によって補填させていただきましたのでご安心を。」

召喚主の犠牲って、召喚元は死んでるとか？

多大な犠牲が、質のことなのか数のことなのかはわからないけど。

魂を補填って・・・血の気が引いていく。自分の魂に、異物を、召喚主の魂だかを混ぜられているのか？

「さらに、皆様に新しい生活をご堪能いただくために、直前に皆様がやっておられたゲームを皆様の力として組み込ませていただきました。皆様風に言うと、チートというやつでしょうか。」

直前までやっていたゲーム。なら、何があっても乗り越えられる自信はある。それだけの時間と情熱をかけてきた。

「まってくれよ。ゲームを組み込んだって・・・私がやってたのは将棋だぞ！何の力になるんだよ！」

「俺だって、レーシングゲームだぞ！RPGやFPSならともかく、役に立たないじゃないか！」

「俺始めたばかりでまだレベル13だぞ！不公平だ。」

再びざわつき始める。

みんなばらばらのゲームなのか。いったい何の基準で選ばれたんだ？

「知らねえよ。」

突き放したこの一言で再び静寂に包まれる。

「皆様の世界のゲーム事情には興味ありません。プログラムというのですか、同じ法則で作られていましたし、この世界とも相性が良さそうでしたので利用させていただきました。なにせ、召喚主様のご要望が非常に厄介でした。柔軟に対応した次第です。あ、でも一応、数値のバランスはとらせていただきましたよ。何せ、同じ意味を持つはずの数値でも、ゲームによって呼び方が違ったり、同程度の性能でも全く違った数値だったり、苦労しました。でも、不公平ってのは確かにそうですね。レベルってやつですか、これが強さの差なんですかね？じゃあ、みんな公平にしましょう。うん、1なら問題ないでしょう。そうそう、所持品も無くしておいた方がいいですね。これなら皆さん平等だ。」

「ふざけんな！レベル1だと!!オレは150以上だったんだぞ！」

「所持品って、装備無しかよ！そのどこがチートなんだよ！」

「レベルも所持品も私がやってたゲームには関係無い！どうにかしてくれ」

そこら中で怒声が響く。

「ああ、この世界の常識は植え付けて差し上げましょう。最低限生活できるように。良かったですね。何もわからず野垂れ死にするリスクが減ることでしょう。」

怒声は収まるどころか全体に波及している。

「野垂れ死にするリスクが減るって、何かの目的のために呼ばれたんじゃないの？なにまるで、ほとんどがすぐ死ぬみたいじゃないか。」

ぼつりつつぶやいた一言が、怒声をびたりとやませた。

自分でも聞こえないくらいの声量だったはずのつぶやきが、はっきりと、全員の耳に届いたようだ。

姿も見えない案内人の顔が、邪悪に笑ったような気がした。

利用された。

何のために？

静かにさせるような必要はない。

なら理由は・・・

「正解です。異世界の事情など、一悪魔にすぎない私に分かるはずもございません。だか

ら、とりあえず数を揃えました。契約は召喚主の望みをかなえる力を持った者を召喚すること。で、かなえることではありません。ですから。全員死んでいただいても差支えはありませんが、10万の魂の代価ですので、少しだけサービスさせていただきました。」

誰も一言も、身動き一つしない。

どこかで案内人を神様だとか、それに近い存在だと思い込んでいた。それなら、どんなにひどい神でもすぐ死ぬような扱いはしないだろうと。召喚や転生時に出てくるのが神様だなんて、それこそ物語の中のお約束じゃないか。

代価が10万の魂？つまり10万人死んだってこと？

あちこちですすり泣くような声が聞こえ始めた。

それがだんだん連鎖していく。

大狂乱になるまで時間はかからなかった。

このためだったんだ・・・。

この大狂乱のために、自分の声にもならないつぶやきを利用された。

あいつは本当に悪魔なんだろう。

「では皆様。良い人生を。」

阿鼻叫喚の中、真っ白な世界が暗転する。

真っ黒な世界に。

周りの人の気配も無くなった。

どこに落とされるんだろう。

まともなところとは思えない。

とにかく生き残る。それだけを目指にしよう。